水産研究のフロントから

近畿大学グローバル COE プログラム 平成 21 年度 第 1 回シンポジウム 「クロマグロ養殖業の現状と展望」に参加して

Kinki University Global COE Program

The 1st Symposium, 2009

Present Conditions and Prospects of the
Pacific Bluefin Tuna Culture Industries

「食卓からマグロが消える」と言われはじめて久しいが、大西洋クロマグロやミナミマグロの急激な資源減少とが相まって、最近、国内のクロマグロ養殖生産量が増加しつつある。しかし、クロマグロ養殖は現在でも天然稚魚を種苗にして養成・生産することから、養殖生産量の増加は結果として天然資源の減少に拍車をかけることになる。ICCAT, CCSBT, IATTC, WCPFC などによるマグロ類の漁獲制限が強まるなか、クロマグロをはじめとするマグロ類の産業的な種苗量産化技術の確立に大きな期待が高まっている。本学水産研究所は 2002 年に世界に先駆けて太平洋クロマグロの完全養殖に成功し、続いて、2003 年からの 21 世紀 COE プログラムと 2008 年からのグローバル COE プログラムで、本学大学院農学研究科とともに国際的な教育研究拠点を形成し、種苗量産技術のみならず、さまざまな分野にわたる貴重な応用的かつ複合的知見を多く集積してきた。今回はこれらの情報発信の一環として、平成 21 年 7 月 22～24 日に東京ビッグサイトで実施された“第 11 回ジャパン・インターナショナルシーフードショー”において、標記シンポジウムを併設開催したところ、多くの研究者とともに、漁協、民間養殖関連企業、養殖業関係者と一般市民の方々の 200 名に近い参加が得られた（写真 1）。

まず、主催者側の本学副理事長・参議院議員世耕弘成氏から開会の挨拶があり、次いで、グローバル COE 拠点リーダー熊井英水氏が、クロマグロ完全養殖の達成に

まつわる努力と経過、将来の展望について、宮部尚純氏（水産総合研究センター）が、世界のマグロ資源の利用状況と管理の問題点、漁獲量減少の原因、資源解析の課題について、宮下 盛氏が初期減耗の原因究明と対策などについての講演があり、午前中のプログラムを終了した。午後からは、石橋泰典氏が産業的な人工種苗量産化・中間育成技術開発について、滝井健二氏が配合飼料の開発と実用化について、塚正泰之氏が養殖クロマグロの品質・肉質改善と水銀含量について、高木 力氏が最適なクロマグロ養殖施設の設計システム NaLA（Net Shape and Loading Analysis system）について、婁 小波氏（東京海洋大学大学院）が市場経済におけるイノベーションであるクロマグロ養殖の重要性について、小野征一郎氏が経済的観点からクロマグロ養殖業の課題として、産業的な種苗量産化、配合飼料開発、漁場利用などについての講演をそれぞれ行った。小休憩の後、小野氏がコーディネーターを務めるパネルディスカッションに入り、若杉金一郎氏（双日ツナファーム）が商社系養殖企業としての立場と営業コンセプトについて、升間主計氏（水産総合研究センター）が水産総合研究センターにおけるクロマグロ養殖研究の現状と課題について、村田 修氏が本学水産研究所における今後の取り組みについて、滝井氏と婁氏はそれぞれ先の講演の補足説明を行ってから、本格的なディスカッションが始まり、実際のクロマグロ養殖がかかえる問題点のうち、適正な種苗サイズと価格、イリドウィルス症とワクチン実用化、正確なクロマグロ養殖量の把握の必要性に関して、参加者も加わって熱い論議が交わされた（写真 2）。最後に、太田博巳氏の終りの挨拶でシンポジウムを無事終了した。

今回のシンポジウムでは、クロマグロ養殖産業には種苗量産・養成から商品流通まで、解決すべき多くの課題が残されている厳しい現状を新たに認識したが、その先には世界に向けた飛躍的な発展の可能性が待ち受けていることも実感することができた。

（近大水研 Amal Biswas）

写真 1 シンポジウムの様子（マイクを持つ熊井リーダーの奥が筆者）

写真 2 パネルディスカッションの様子